

例えばヤマネでは、心拍数（脈拍）も通常の1/10以下に下がり、呼吸数もごくわずかになります。日常の「眠り」の状態とは異なり、代謝活性が低く、目覚めることはありません。体が消費するエネルギーをなるべくおさえることで、冬を越す事ができます。

これに対して、クマやアナグマなどは体温の低下も2~3℃位で、ちょっとした刺激で自発的に目覚めます。クマなどの場合、ヤマネの『冬眠』と少し違って、『冬ごもり』と表現したりします。

クマやアナグマはこの『冬ごもり』中に出産をします。少し話がそれますが、クマの交尾期は6~7月です。交尾後直ぐに妊娠してしまうと、冬ごもりの準備期間と出産・育児という大仕事がかさなってしまい、子供はもちろん母親も冬を越せなくなってしまいます。そこで、『冬ごもり』中に出産できるタイミングで、受精卵が着床し妊娠する体の仕組みになりました。これを「着床遅延」といいます。

動物園の冬対策

お待たせしました。いよいよ飼育係の出番です。大森山動物園にはライオンやチンパンジーなど暑い地方に住む動物達があります。また、冬眠をしない体の小さな動物もいます。これらの寒さに弱い動物を守るために飼育係は一生懸命頑張っています。どのように頑張っているか、その活躍を皆さんにご紹介します。

建物の工夫

これは飼育係の活躍によるものではありませんが、チンパンジー舎・猛獣舎・ゾウ・キリン舎などでは、どうぶつ達が寒くないようにボイラーを炊いて、温度管理をしています。中にはこれだけで満足できず、チンパンジーのように毛布を頭からかぶっているものもありますが…。

赤外線ランプやストーブで保温

アフリカタテガミヤマアラシやミニブタ、フラミンゴは赤外線ランプで、新世界（南米）サル舎やインコ舎、ヤマネコ舎などでは石油ストーブで、体が小さいコモンマーモセットやワタボウシパンシェなどは赤外線ランプ+石油ストーブで寒くないようにしています。ちなみに年間の暖房費は約400万円！

毎年恒例の大捕物

フライングケージ（以下ケージ）のある塩曳湯は真冬には全て凍ってしまいます。そこで、毎年閉園してから、ケージにいる鳥たちを冬を越すための建物『越冬舎』へ引っ越しさせる作業があります。

まず、端のフェンスに捕獲用のネットを仕掛け、鳥たちに気づかれないように水中に沈めておきます。それから、2隻のボートと今年から筏が加わり、ガンやペリカンを追い込みます。以前は飛び回られるとかなり時間がかかったのですが、ケージの天井が無くなってからは全ての鳥を飛ばないようにしたので、比較的捕獲が簡単になりました。それでも、一部のガンは水中に潜って逃げ回ります。最後は疲れ果てて捕まりますが。



▲越冬舎の中で春を待つ鳥たち

出初め式ではないけれど…

寒さにはある程度強いものの、強く冷たい風にあたると体力を消耗したり、体温を奪われてしまいます。また、風にあおられると体重の軽い鳥たちは思わぬ怪我につながります。そこで、猛禽舎やキジ舎などでは風からどうぶつを守るために、防風ネットを張り巡らせます。この作業はハシゴに乗って、かなり高いところまで登って作業しなければならず、ちょっとドキドキします。

劇的ビフォー〇〇〇ー？

動物園の飼育係は時に大工さんにもなります。中南米出身のショウジョウトキが住むトキ舎ではトキたちの快適？空間を急ごしらえで作ります。部屋を囲うことで冷たい風や雪からトキを守り、赤外線ライトを当てて、暖を取れるようにします。



▲トキ舎の冬囲い作業

その他

その他の工夫としては、足の長いキリンが運動場で転ばないように氷を割って地面を出したり、どうぶつ達がエネルギー不足にならないように、夏場よりも餌を増やしたり、餌の食べ具合をはじめ、より念入りにどうぶつの観察します。大雪が降った時は天井のネットが切れないように雪落としをします。

最後に

気温や天候の変化が動物達の命に関わる冬場は、飼育係にとって、ひとときも気を抜くことのできない季節です。真冬日も吹雪の日も、正月も関係なく、飼育係は動物達のために365日頑張っています。どうです？かっこいいでしょ。